

濱田樹里展

2009年09月05日

「放課後のほらっば」と同時に始まった所蔵作品展内の一部屋（展示室6）で、「濱田樹里展“根源の在処（ありか）”」を開催しています。これは注目作家をご紹介します「テーマ展」と、あいちトリエンナーレ2010に向けた「現代美術の発見」シリーズ3（1は三沢厚彦さん、2は平田あすかさん）という位置づけとを兼ねたものです。

濱田樹里（はまだ・じゅり）さんは1973年生まれで2000年に愛知県立芸術大学大学院の日本画専攻を修了、現在名古屋造形大学で専任講師をされています。



↑ 《焰にたつ華》2005年



濱田さんの作品は長大です。展示室内の2点はどちらも縦2mで、横は約17mと約11m。それぞれ壁2面にまたがっています。



↑ (《流・転・生》2009年)

マグマのような赤や、鳥の羽のような白がうねる画面に、巨大な花々が咲き・しおれ・再び芽吹くさまが描かれています。赤色には、濱田さんが小学校高学年まで育ったインドネシアの赤土の大地がオーバーラップされているとのこと。花は大地を覆う生命体の象徴で、長い時の流れの中で生死を繰り返す命の根源がテーマとなっています。



↑ 作品部分

愛知県立旭丘高校の美術科在学中から日本画の画材を用いているのも、土や砂の触感に近いという理由から。絵に近づいて見ると、ざらざらとした岩絵具のほか、貝殻を砕いて作る胡粉（ごふん）、金・銀・赤・青の金属箔などの材質感も豊かです。

大作ではありますが、洋画家のように大キャンヴァスにグイグイ描くというのではなく、幅 70? のパネルを床に寝かせての制作。アトリエでは作品の全貌は見えません。細かな作業で蓄積されたエネルギーが、展示会場で爆発するのもかも。



↑ 展示室 6 とその前通路の作品展示風景

展示室外、通路の壁には幅約 4.5 m の《陸の花》（2003 年）。これら 3 点が鑑賞者を取り囲みます。

「これは写真じゃわからないなあ」と思った貴方、そのとおりです。会場へおいでになり、大作の流れに身をまかせてみてください。

（ T. M. ）